テレビドラマ「太平記」やぶにらみ

丸尾壽郎

いまNHKテレビで放映されている「太平記」は、吉川英治の『私本太平記』をもとに制作されたものだが、歴史もののドラマとしては、『太平記』の記述や、当時の風俗、芸能をはじめ甲冑・武具の考証など、史実に関わる部分にはかなり目配りのきいた制作、映像化がなされている。合戦場面ばかりが続くと、さすがに見飽きるが、高時一門の東勝寺での自害あたりまでは、ドラマづくりのうまさと、みごとな映像化とでたのしく観た。

『私本太平記』は、京から鎌倉へ戻る足利又太郎（尊氏）を京極佐々木高氏（道誉）が近江の愛知川のあたりで呼びとめ、柏原の館で藤夜叉という美女に逢わせる、というところから始まる。藤夜叉はテレビドラマ「太平記」でも田楽の一座を率いる花夜叉とともに登場してくるが、この名前は実は吉川英治の創作ではない。世阿弥の『申楽談義』に、「一忠以前、だうれん（道蓮）、かうれん（香蓮）とて、名人ありけるなり。いづれも本座の者なり。花夜叉は新座の者なり。」と記されていて、れっきとした実在の田楽能の芸人なのである。この花夜叉は「河原の勧進桟敷崩れの時、本座の一忠、新座の花夜叉、かれこれ四人づつ、八人にて恋の立合をせしに、『恨は末も透らねば』と上げて、言ひ納むる声つまりければ、一忠、しはぶきをして、扇の要取り直し汗を拭ひけるに、花夜叉、『末も透らねば』と、ふときりに言ひ納めて、払はれけり。一忠、花夜叉に恥を与へけりと当座申しき。」（同書）と評されているその人だが、なぜか『太平記』の四条河原桟敷崩れの記述にはその名が見えない。テレビでみる花夜叉も藤夜叉も夜叉というにはあまりに華奢で、それに水干などを着て舞うので、白拍子かとも思うが、背後にこうしたリアリティをもった存在として登場してくるところが吉川英治の蘊蓄のある人物造形の手法で、しかもそれが歴史ドラマとしては時代性や当時の庶民諸芸能の象徴的な表現ともなっているところが、私にはおもしろく思われる。

さてまた歴史もののテレビドラマというものは、少なくともそれを生み出した現地を内包しているのでなくては、空疎である。しかし、今日、歴史の現地そのままというようなドラマづくりは望めるものではない。だから、NHKが、毎回、ドラマの終りに「太平記のふるさと」と題して、史跡を実写したのを放

映しているのは、歴史の現地を現認するという意味で評価されるが、なんとも絵葉書風で、NHK御当地ドラマの片鱗もちらついているようなところがあり、なによりもいま観たドラマの現地と結びついていないので、あの激動の時代の歴史の面立ちに、視聴者をきっぱりと向き合わせる迫力に乏しい。とは言え、まざまざと往時をしのばせるような史跡は、幾らもあるものでもない。そのなかで、かつて私が訪れた八葉山蓮華寺の五輪塔群は圧巻で胸をうつ。

「番場、醒井、柏原、不破ノ関屋ハ荒果テ猶モル物ハ秋ノ雨ノ」は、有名な俊基朝臣東下りの道行文の一節だが、蓮華寺はその中仙道の番場の宿にある。勅使門のまん前を名神高速道路が横切って参道が分断されているが、広くて森とした境内は往昔の風情をしのばせる。今は浄土宗だが当時は時宗一向派であった。ここは、「太平記のふるさと」でも放映しなかったと思うが、時の六波羅北の方探題北条仲時が宗徒の者及びそれに従う郎党ら四百三十二人とともに自刃したところである。

元弘三年（一三三三）五月七日、後醍醐方に寝返った尊氏の六波羅攻めに敗れた仲時は、糟屋三郎を先陣に立て、後陣を六角佐々木時信に託し、光厳天皇、後伏見・花園の二上皇の鸞輿を連ねて、南の方探題北条時益とともに鎌倉へ落ちのびていく。九日、中仙道を番場の宿まで来たとき、行く手を五辻宮や京極の軍勢に阻まれ、防戦及ばず、玉座を蓮華寺本堂に移し、仲時以下四百三十二人が堂前で自刃した（『太平記』巻第九）。『保暦間記』『神皇正統記』『増鏡』なども酸鼻を極めたこの集団自害のことを記しはするが、いずれも簡略である。その中で『梅松論』（延宝本）は、「のがるべき所なかりしかば、恐ながら仙洞を害し奉り各討死自害可レ仕由、一同に申しければ、大将仲時いはく、我等命を生て君を敵にうばはれんこそ恥なるべけれ、命をすてて後は何事か有べきとて、西時計に自害する間、随う輩数百人、同命を落す。南の方時益は七日の夜四宮河原にて、ながれ矢にあたりける。死去しけるを家の子頸を取って当所に持ち来るを、北の方仲時是を一目見て自害せしほどに、彼の時、同じく腹きる者の名字どもを馬場の道場に注しをきければ、世の知る所なり。」と、かなり詳しく記している。武士の恥の思想や天皇に対する忠誠観、時益の死に場所をはじめ過去帳のことにも触れていて貴重である。『太平記』は、自害の惨状を「血ハ其ノ身ヲ浸シテ恰モ黄河ノ流ノ如ク也。死骸ハ庭ニ充満シテ屠所ノ肉ニ不レ異。…哀ナリシ事共、目モアテラレズ、言フニ詞モ無リケリ」と記しているが、「主上、上皇ハ此死人共ノ有様ヲ御覧ズルニ、肝心モ御身ニ不レ傍、只アキレテゾ坐シマシケル」と、警固の士らの自害、阿鼻叫喚を目前にしながら、茫然自失、袖手傍観の態であったことを書き添えるのを忘れてはいない。

時に蓮華寺の住僧同阿良向はこれを憐み、かれらの菩提を弔うために四十八日間の常行三昧念仏を修し、戒を授け阿弥号をつけて、『陸波羅南北過去帳』（国指定重文）を作った。「惣而於当寺討死自害人数肆百三拾余人雖然分明交名不知輩不注之云々」の注記があって百八十九人の名が書き留められている。中に十四歳から十九歳までの若者が十四名もいて胸が痛む。寺域の小高い山の裾の木立の中に、今も仲時の墓石を中心におよそ三百基余りの苔蒸した大小さまざまの五輪塔が、四段に並んで立っている。五輪塔のひとつひとつが身を寄せ合うようにも、折り重なるようにも見えて啾啾たる鬼哭を聴く思いがする。

この五輪塔群と過去帳とを放映しなかったのは、まことに残念な思いがしてならない。